



農業が宇宙と繋がる。  
その発想が、地球を救う。

日本、名もなき農地。田の田灌を埋め尽くし、賑やかな働きを繰り返していた畑々が、漸く寂入らうとする薄明の時、そこに、聞こえぬほどの運転音で、無人の機械が、耕作地を滑るように進んでいく。まるで星間を進む宇宙船と見紛うその姿こそが、地球規模の農業の特長を救う可能性を秘めたクボタのアグリロボトラクタの、未来的な姿である。

「スマート農業が、日本の「世界の」農業の未来を救うと期待されている中、その期待を具現化することのでもっとも、希望の星を掴むことはできないものなのか」

クボタは、そんな高い壁に、真っ向両機戦しています。GPSを利用した、無人の自動運転作業による「超省力化」、無人下でも障害物を異常姿勢を検知し、自動停止するなどの「高度な安全性」として、アグリロボトラクタを軸めとして、クボタのファームバイオートシリーズは、トラクタ、コリンバイン、田植機をフルラインアップすることで、日本農業を、スマートで魅力的な先端産業へと進化させ続けているのです。

射し込んだ「糸の曙光」、この機械が宇宙船ではなくトラクタであることを教えてくれる。人を棄せず、遠く宇宙からの情報で正確な農作業をこなしていくその姿こそが、宇宙と農業を繋ぎ、地球規模の食糧事前の救世主となる存在であることに、気付くものはまだ少ない。

壁がある。  
だから、行く。